

総合コメント

ドーク…まずは、あまりにも単純な印象ですが、二人の先生のお話を聞くと、やっぱり日本はアメリカほど分断社会の問題はないんですね。将来はどうなるかというご指摘はありますが。それを私ども、今もう考えているのはなぜでしょう。いくつかの証拠を出したんですけども、経済的なことを考えますと、さつき先生がおっしゃったような自由主義的な経済的運動とグローバリズムという問題がアメリカでも全く同じような問題になっているので、そういう経済的な自由主義的な影響が分断社会を進めるとしたら、なぜ日本はそこまで分断されなかったのかというのが問題になります。やはり大野先生が四つに分けたんですが、価値の問題、文化の問題が大事だと思っただけで日本の価値のところ、文化的なものがまだまだ、かなり健全なのはありがたいことですね。

先崎先生は、非常に面白い発表で私は勉強するばかりで質

問する資格がないんですけど、一つおっしゃったことが私にはピンときたんですが、スポーツの方から道徳教育をできたらそれはいいんじゃないか。私は特に、今アメリカでは男性の方が危険になっているんですね。教育では。なぜかというところスポーツ教育がすごく弱まっているか、または性別（LGBTの問題）の中で、男性が女性のスポーツに入ってしまったって男性のスポーツの中ではなかなか自信が持てなくなってきた。だからもうちょっと男性的なスポーツで画期的な道徳教育が欲しいと思っただけです。

先崎…まずドーク先生へのコメントなんですが、文章も添付されて資料もありますので、そこに沿って二、三点。まずページの真ん中らへんなんですけど、ここで非常に面白いことが出てきました。それは真ん中の段落の上から五―六行目ですが、結婚や政治、そして教会を単なる選択的なものとして想像しがちです。この「選択的」というところですね。僕たちがおかれていますものって、「自由」イコール「選択すること」だと習っていると想像してしまうんですね。これは坂本多加雄さんという政治学者の方が書いている本なんかでも印象的なんです。選択すること、多様性に開かれていることっていうのはイコール「自由」なのか？というのはいけなくて、僕たちは多様なものに開かれていると時に嫉妬にくるって心が自由

じゃない事って多々あるんですよ。そういう意味で言うと我々は政治においても教会なんかがそうなんでしょうけど、宿命にあるものの中に置かれている、ある共同体の中に生まれた、私は埼玉県〇〇市に生まれたとかですね、そういうことを背負って行ってそこを良くするっていうことを考えるってことは重要なんじゃないかなって思いました。それからドーク先生、非常に面白いところがたくさんあるんですが、あともう一つは、教会に行くことを重視されたんですがその中で特に教会って個人の内面の問題でなくて教会に行くっていう行動ですね。これを繰り返すっていうこと、これが地域の中に自分がなっていていくんですね。この行動とか形式というのを重んじるというのがとても大事なことを意味しているのかなって思いました。それとのつながりが恐らくあると思うんですけども、大野先生の方のコメントに入りたいのですが、面白いなと思ったのは、社会的分断とかのお話の中で、日本においては二大政制が簡単に言うとならないというお話をされたと思うんですけど、その二大政制がなんで論じられないかという明確な対立点がないからなんです。では、明確な対立が起きる時ってどういう時かという、宗教とか人種とか人間の根源に関わる所でおそらく対立が起きるんですよ。そうすると日本にはやはり人種問題も宗教における対立とかもおそらくないというのがあるだろうと。それとの関わりでアメリカの話で、パワ

ーポイントでもあったんですが、アメリカにおいて争点になるのは妊娠中絶とか同性婚とか銃規制とかなんですけど、妊娠中絶って日本だとなんとなくそういうことをしてはいけないんじゃないかという倫理道徳の問題なんですけど恐らくこれは宗教の問題なんです。アメリカにおいては、同性婚も。そして銃規制も恐らく文化の話なんです。アメリカというフロンティアを開拓してきた文化の話なのでアメリカにおいて宗教という深い伝統に基づいた話が日本においては、リベラルっぽい感じの人が急に出てきて真似してデモしたりして正義感に訴えているんですが、恐らく何の文化的背景もなく正義感にかられてやっている限り問いとして日本においてはいい意味でちゃんと継承されないだろうと思います。それと、最後に一点だけ。閉じたコミュニケーションの話があつたんですが、これはネット関係の用語でいうと島宇宙というらしいのですが、要するに小さな島がたくさん出来てコスモスが形成されている。現代の日本社会においてはそういう風に自分の気持ちのいい関係性だけのところで、気持ちのいい情報だけを聞いていて、島宇宙というの島ですから、周りは海ですから閉じられてしまっているというこういう社会になっていると聞いたことがあります。それなんかも議論の参考になるかもしれません。

大野…私もお二方のお話を聞いて非常に勉強になったんですけど

ども、やはり「分断化をどういう風にとらえるか」の問題で、先崎先生の表現で言う「砂粒化」というか個人がバラバラになっていくことに關しては、私は基本的に共同体主義という形で出てきている、コミュニティリズムというのが一つ問題になると思う。ドーク先生のお立場もかなりそれに近いところだろうと思うんですね。問題はそこで、教会という形ではある程度宗教の共同体、精神的共同体ということで、そこを強調されたわけですけども、問題はそれ以外の可能性がないのかどうかということですね。先ほど、日本ではどうなのかということもありましたが、実はリベラルの方はリベラルの方で連帯って一つのキーワードとして持つてるわけです。この連帯という言葉の意味するところは少し違うのかもしれないけれど、もっと大きな問題として国家全体として一つの分断をいかに乗り越えていくのかというときに、そこで違う価値観を持つ人との間でいかに分断を乗り越えることができるのかということですね。教会の重要性というのは非常に分かっておりまして、聴衆の方の中に廣池学園、モラロギー関係の方が多いのですが、まさに廣池千九郎が言った家の伝統、国家伝統、それから精神伝統、これと全く合う、つまり、三つの恩人の系列つまりそれぞれ人間にとって重要な共同体があつて、それぞれの共同体の中心となる系列というふうにとらえたいのではないかと思つていますが、全くその図式というのは同じです。問題はそこで自分

と違う宗教を持たない人との間で果たして共生とか一緒に生きていくことができるかという、おそらく今回のシンポジウムの一つのキーワード、キー概念というのはその所に出てくるんじゃないかなという風に思います。それから先崎先生について言うと、一九一〇年というところですね。先ほど比較的、帝国主義とグローバル時代をイコールで結びましたけれど、現在日本の置かれている状況との間に多少の相違つていうのがあると思うんですけど、そのあたりの所について先生なりのお考えをお伺い出来たらと思うんですけど。ただ、まさに先ほどの、富に行つてしまう可能性というのは現実においても出てきている可能性はあるのではないかなと思つていました。コメントというより感想ということで終わらせていただきたいと思つています。

#### 全体討論

モーガン…今までの話を聞きますと、道德基盤は一体何かと。トクヴェイルの言うバラバラの社会を束ねる基盤は一体何ですか、と、そこから始めたいと思つています。

先崎…先ほどまで齒切れよくしゃべつていたのに齒切れの悪い答えを今からしますが、目下勉強中ということでございまして、と言いますのも、要するに束ね方というのは、例えばリベ

ラルを標ぼうしていらっしやる人って連帯っていうんですよ。それって例えばデモとかがそうなんです。だけど私はそういうのに対して批判的だと一貫して主張して批判されているんですが、そこには時間がないからというんですよ、私の理由は。要するに一時的な one issue 政治的な issue で結びついた連帯って、必ず連帯が続いていって組織化して運動していくと必ず勢力争いがおきて分裂していく。そこには右左とかいい悪いってないと思ってるんです。そうした時に、人間が連帯するのを担保してくれるものって時間によって蓄積されてきた「あいつの事嫌いなんだけど、ずっとかかわってきたんだから俺が一番よく知ってるんだよ」みたいな。そういうことからすると、私が一つ注目しているのは先ほど引用した宇野重規さんという人が『民主主義の作り方』ってちくま選書で出しているんですけどそこに書いてあるのは今までのように連帯とか共同体の作り方を武装型からプラグマティズム型にかえたらどうかと。プラグマティズムって、私は素人なんですけども、なるほどな、こういうことなのかと読んで知ったのは、あの哲学は普通試行錯誤とか実践主義ってしか思わないんですけど、もつと深い深い思想であって、要するに南北戦争がその哲学の始まり。南北戦争っていうのはあまりにも多くのアメリカ人同士が殺戮しあったんですね。人間はそういう場面に出くわすとおそらくこの二つになるだろうと。一つは、「我こそは正義である」と、相手の

正義を一切認めないというものすごい戦争になる。その裏返しとして、この世には正義とか真理なんて存在しないというニヒリズムですね。徹底的な相対主義に陥る。この二つに両極端に分裂したんですね。その時に精神的な危機を感じたプラグマティストといわれる精神的な思想家たちが現れて、では我々にとって真理って何だろうっていったときに、我々にとつてある時間使用してみたところ、実際に水を飲んでみたところ、ある時間体になじんで気持ち良かったとする。そしたらその時間の積み重なりをもつてとりあえず水というものはいいものであるという風に決めていこうという。時間によって耐えられるものを差し当たり善と呼んでいいんじゃないかと。真理と呼んでいいんじゃないか、こういうことを言ったというのがプラグマティズムでありまして、私はやっぱり時間の積み重ねって大事だと思う。では、抽象的なことじゃなくて具体的なこと話すと、私が考えているのは皆さんと比較的同じなので、やはり国家主導で一億総活躍とか地方創生ってやり始めるとおそらくうまくいかないとは私は思っていて、地域の中から地域について勉強するような機会を、たとえば小学校教育とかでやっていくべきなんです。それが今の文科省とか国が音頭を取っている地方創生っていうのは、ITとかが流行ってきているからそういうことを学ぶために大人社会に学校教育を開いていけて感じなんです。地域創生において。だけどおそらくそうではなく

て、もっとローカルなことですよ。どこに神社があつて昔津波が来るからこれ以上下がるなつて書いてあつたとかですね。そういうことを学んでいくことで成り立っていくんだらうなつて私は思っています。

モーガン…ありがとうございます。見事にアメリカの南北戦争の時代の後の思想を分析されていると思います。まさにウィリアム・ジェームズが書いたその通りのプラグマティズムだと思います。では大野先生はいかがでしょうか。大野先生がおっしゃつた中庸が、孔子が言っていることが、プラグマティズムに近いと、または、孔子が言っていることがプラグマティズムに正反対と、その二つの意見があると思えますが、中庸の場合はどうですか？ もうちよつと、プラグマティズムが道徳に基づいている考え方かどうかその点についてお伺いしたいと思います。

大野…私もこの中庸ということについてそれほど深い知見を持つていないわけではないんですが、先ほど創立者の廣池千九郎の言葉として紹介させていただいたんですけど、廣池の場合、私の感覚だと非常にイデオロギーというのを、つまりイズムというのを嫌つたんじゃないかなという印象を持っているわけで、そういう意味でいうとプラグマティズムもイズムなんですけれど

ども、現実のもちろん重要な真理というものがあるとしてもそれが絶対のものであると考えたところでイデオロギーになってしまうということを避ける。つまり愛国心ということを非常に強調するんですがその愛国心が強くなりすぎて絶対のものであるという一面を一面で言ってるんですね。そういう意味で言うところ中庸を単なるバランスとってしまうとあまりにも俗な言い方になってしまうんですけど、一面で廣池は自己反省つてことを言うわけですが自分がある程度正しいと思いつつもそれに対して懐疑を持つつかどうかそれを疑うという事。これは精神の緊張が必要とされる。信じてつ疑うつていうのは非常に緊張すると思ふんですが、人間として頼りになるものにはすがつてしまえば楽かもしれないけどあえてそれをやらないというある種の精神の強さなのかなと思ふんですけども、とりあえずそんなところですか。

モーガン…ありがとうございます。先崎先生、今のお話に対するコメントはありますか？

先崎…今の話はとつても面白くて、中庸であつたり普通であり続けるのはすごく勇気があることなんです。おそらくデモとかいって騒いで、俺たちは今から突入するぞ、エイエイオーと

というのは勇氣じゃないと思ってます。そういう時に、本当にこれは正しいのかとか、私は本当にこうなんだろうとか全員が右に走っていくときに一人ここに立ち止まっているっていうのは、これは大学生によく冗談で言うんですが、駅に入った時全員が一番ホームに向かって駆け上がっていくとすね、電車がもう来ていると思って走るんですよ。そうすると電車は来てなかったりするんです。要するに人って人に流されるわけですよ。だけどその時に本当に電車が来ているんだろうかと思ってしまう。立ち止まってみると勇氣っていうと大袈裟なだけで、そういう所に中庸の持っている、先生がおっしゃってる緊張感っていう普通であることを維持し続けるってとても緊張する営みなんですということが言いたいんじゃないでしょうか。

モーガン…ありがとうございます。先崎先生がおっしゃった「勇氣」という言葉ですけども、ドーク先生にお聞きしたいんですけど、今のアメリカ社会の中で正に群れ現象が起きているのではないかと思えます。みんなが右に走れ、左に走れ、団体として、集団として動いているような気がしますが、それに対する対立の立場をとるのに勇氣が必要じゃないかと思えますがこれからのアメリカの社会の中で、勇氣の必要さまたは重要さについてコメントを頂きたいと思えます。

ドーク…まず、現在世の中では二極化になっているという質問ですね。実は最近若いアメリカ人、若い保守派の人たちが社会主義をそんなに恐れていないんです。恐れていないというよりは社会主義的なことを導入するんです。主に学費のローンですかね、アメリカは極端になりますが、三つに分かれているんですね。これからの若い世代はどうなるんでしょうか、影響があるかどうかそれはわかりません。やはり勇氣がいるのはわざわざ三つのグループを融合的にするというのではなくて一番危ないことは一番勇氣のいることはさっきおっしゃったようなLGBT問題ですね。私は大学で中絶に反対すると批判されるんですけど、クビにならない。しかし「男と男は結婚する権利がない」とはつきり言ったらたぶんクビになります。それが一番勇氣が必要な言論の問題だと思うんですね。

大野…三つのグループというのは具体的にどんなものですか？

ドーク…民主党派と、古い共和党と、新しい自由主義的な保守派、それは主に若い人達。

モーガン…今の話によりますと、社会が政治のことによって分断されていると私は理解していますが、もう少し人格の基盤に戻って、「人とは何か」「人格とは何か」、それについてお話を

したいなと思います。例えば、人になるために宗教が必要か、または家族が必要か、またはある意味では共同体が必要かとか、または教育。一番基盤のレベルでは人はどうやって人間になるか、人はどうやって人になるか、という質問に答えていただけだと思いますが、大野先生いかがですか？

大野・おそらく今の議論というのは、個人主義の考え方についてのはそもそも人間である、独立した人格であるという事に対して、共同体主義の方が、共同体の中で人間になっていくんだという形ですよ。先ほど先崎先生の議論でいくと時間の中で積み重ねによつてということなのでしょう。そうすると、伝統そのものなのかなつていうところが、時間の積み重ねていう所です。人間っていうのがある意味で過去の積み重ねのなかでできてきている面と同時に個人としての独立の人格がある。それは明確に分けられないと思うんです。先崎先生そこから先ほどの時間の積み重ねていうのはどういう風にとらえられるかという点についてお伺いしたいです。

先崎・僕にとつての時間っていうのは簡単に言う個人を超えているという感覚があつて、それは何でかつていうと個人というのはたかだか八〇年ぐらいの人生なんです。そこで判断できるっていう事は数少ないんだって気が付くということですよ。

ね。個人の判断だけによれば色々な選択ができるから、より海岸沿いに近いところがおしゃれだからって家造つてしまっただけ、万が一地震が来た時にそこに津波が来て亡くなつた人がいるんだつていうかつての教訓が石に刻んであればやっぱりそこに造らない方がいいなという判断が働いて造らなかつたりするわけですよ。個人の判断つていうものに対する謙虚さを担保するのが時間なんじゃないかなと僕は思います。

ドーク・先ほどの人格、個人のお話が非常に面白いと思います。二〇世紀のフランスの哲学者ジャック・マリタンの著作の中でこういうものが取り上げられているんです。マリタンによると、人格と個人の違いが大事だと言つてるんですね。その違いつていうのはどこにあるかつていうと、個人は孤立された人間・個人主義の人間、それが理想的ですね。でも実際は人間とはそういうものではなくていつも家族とか社会とかコミュニケーションに絡み合つていましてね。それが分かつていけば人格というものが半分ぐらい理解できると思っています。その他の半分が全体と人間の社会ばかりじゃなくて神との関係があるんですね。個人はある意味では神はいらない。人格はその人格の核はどこから来るかという神が入れたんですね。人格はよその人のためと神のおかげでというような人間ですね。非常に面白いもので説明できないんですがジャック・マリタンの三つの宗教

の变革についての本が日本語に訳されていて、非常に面白いです。

先崎…今のドーク先生のお話っていうのはかなり日本の思想の核心部分に触れるとても重要な話で、一見俗っぽくも言えちゃう訳ですね。日本においては個人というのは神様とかを全く背景にしていない。それに対して人格というのは、ドーク先生の言い方だと他人との公共性に開かれていると同時に神様から賦与されているものなんだというんですね。ここのとこで一瞬俗っぽくとかつまらなく言うところという風になっちゃう。日本には神様がいないんだけどもって話になっちゃうんだけれども、実はここにはすごく豊かな日本の思想家たちが取り組んだ課題がありましてね。たとえば個人というのが極めてロマン主義的なものなんです。そういうことかという、背景に何も無い。私がすべての事柄の最終決定者であるというのとはとてもしんどいことじゃないですか、っていう。他人から与えられた秩序とか他人から与えられた意見をいれて自分を決定している、結構そういう場面が普通にあるんですね。スーパーに買い物に行って一〇〇円と五〇円の納豆があったら一〇〇円の方をなんとなく買いたくなったら何となく嫁さんに買っていいって聞いて、いいよって。小さなことですがこういうことってありますよ。これは冗談ですが、私の好きな思想家に江藤

淳という人がいて、この人は、夏目漱石の中に正に個人というものの方が非常にどろどろとしたもの、醜悪なものであつて困つてると、じゃあそれをなにが担保してくれるかっていうと、日本にはカトリックの保守主義だとかないんですね。そういうたとき彼が依拠したのは儒教における天という概念なんです。これが漱石とかの時代まであつただけでも以後失われて行つてどんどんロマン主義化していったという事を江藤淳は描いてそれをもう一回取り戻すには彼にとつては国家というものが必要なんだといつて靖国神社とかそういうところに注目していくわけですけども。じゃあ我々にとつて精神を担保する神に相当するようなものは何だろうと考えた時に、おそらく日本においてはさつきからいつてるんだけど、超越的な人格神とか、天もなかなかきついのかな、西郷隆盛とかまではあるけどそれ以降はきついのかなと思うんですね。そうするとやはり地域に根付いてきた伝統みたいなプラグマティズムが言うようなものの方が日本には馴染みがあるんじゃないかなというところが現在僕が考えているところですね。

#### 質疑応答

高橋…今日の議論の焦点は「分断社会とモラルサイエンスーいかに共同性を構築するか」ということにあるわけですけど

も、分断の原因は何かということ考えた時に、ひとつのキーワードは通底する価値が見失われたことにあると、これは一九五五年に開催されましたユネスコの創立五〇周年記念事業シンポジウムで服部英二先生がおっしゃったことなんです。その通底する価値というものをどう探っていくかということモラルサイエンスの課題として私たちはどう認識すればいいのかということが大事なポイントだと思ってるんですが、今日大野先生のご発表で、実は今大学院でジョナサン・ハイト「しあわせ仮説」[「The Righteous Mind」]を読み込んでるんですけども、ジョナサン・ハイトは多様性というものを善玉と悪玉のコレステロールに例えているんですね。その多様性という中に通底する価値というものをどうモラルサイエンスの中で高めていけばいいのか、対立をどう乗り越えればいいのかという事について、ジョナサン・ハイトは最後にはあまり結論ははっきりしないんですが、古代の中国の陰陽論というのをもつてきまして、対立しているように見えるものが実際には相互に依存している、両側面があるんだと、そこに気づく必要があるんだと言っていて、互いに学びあおうと同意することで利益が得られると。彼は二〇年道徳性を研究してきて、最も学んだ重要な教訓は、右も左もみんな道徳的に動機づけられていることだと、ではそこに道徳という通底する価値をどう共有できるかということとが問われるわけですけども、実は歴史認識問題研究会でド

ク先生にもお話を伺いし、合わせて埼玉大学の名誉教授の長谷川三千子先生にもお話を伺った際にこんなことをおっしゃったんです。日米次世代人材育成プログラムの慰安婦問題に関する論文に対して先生が、センシティブな問題についてまず基本的な議論を入り口にして共感を気づき育てることに気長に取り組み、対話の土台を築いた上で賛否両論の忌憚のない意見を出し合って、お手本となるような議論を和気あいあいの雰囲気の中で進める絶好の機会にすると必要があると。これは実際には至難の業ですけども私は男女共同参画会議という政府の会議にいます、入る時には全員が高橋が入るならやめると言って波乱万丈の中で入って参りました。そして一回目に官邸で女性が三割を占めるのは世界の兆候だとおっしゃるので、そうではないという英語の資料をたくさん配ろうとしたら、実力阻止をされて、配れないという現実になりました。以来七年目を迎えておりますが今は和気あいあいたした中で、もちろん議論は白熱して、対決の連続ではございますが、何を申し上げたかと言いますと、対立というものをどういう風に乗り越えていけばいいかという事についてのご質問でございます。まず一つは大野先生に多様性ということと通底する価値というものをどういう風に道徳の中で対話していけばいいかと、先生のお考えを伺いたいことと、もう一つは、ケビン・ドーク先生に、アメリカの学会とかそういう場では深刻に対立している左右の学

者たちが互いに学び合うという場が可能なのか、そんなのは現実離れして全くできていないのか、あるいは今後そういうことについて九月にニューヨークでも発表されますけど、果たして今までの対立を乗り越えることができる場ができるのかどうか、可能性があるのかどうかどう感じておられるのかという事についてモーガン先生も含めてお考えを頂ければありがたいと思います。

**大野**・ありがとうございます。まさにそれが一番大きな問題なんだと思います。先ほど先生がおっしゃられたジョン・ササン・ハイトは最後結論は言っていないで、多分言っていることとしてはそれぞれの持っている価値観はかっこに入れた上で話し合いましようということなんだろうな。今先生がおっしゃられたこと正にその通りなんだな。かと言って何も話し合わないという所で、おそらく道徳的価値で言うならば寛容という言葉が出てくるんだと思うんです。ただ寛容っていうのは気をつけないと、リベラルの方が比較的寛容と言いながら自分と意見の違うものに対しては寛容でないっていう、非常に独善的な寛容として使われていることがあるんで寛容という事は今日はおさなくて中庸にしたんですが、おそらく本来的な意味での寛容って自分と違う意見のものに対して受け入れるっていう態度をまづ作る事なんだけれどもただこれがなかなかできないって

うのは先ほちょっと出した通訳不可能性っていわれる、要するに頭の中の思考の枠組み自体がまるつきり違っていて対話が成り立たないっていうのが現実としてありうる可能性がある。先崎先生が言われた正にプラグマティズムとか多分高橋先生がやられたこともそうなんだと思うんです。現実には目の前にある問題に対して私たちは答えを出さなきゃいけないと、そのためになんか必要なんだっていう事でそこを議論していくとある程度の共通点がそこから見えてくる。もとに立ってる価値基盤の方を先に議論してしまうとなかなかできないけれども現実には引きこもりの問題があつていじめの問題があつて、ほんとに困っている人がいるんだつたらどうするんだつてことを議論していくと、そこから答えを一緒に見つけていける。多分それを一番できるのはローカルなコミュニティだと思ふのは全く先崎先生と一緒に具体的な問題に対して私たちはどういうアプローチができるんだつていうと、もともと持っている価値基盤つていうのをとりあえずカッコに入れて話し合いましようということが出来る。ただ大きな問題というのはなかなか、それこそ歴史認識の問題なんかは難しいことなんだと思います。まづ可能などころからつていう、恐らくジョン・ササン・ハイトもそんな形だったのかなという風に私自身は理解しています。

ドーク・アメリカの学会は対話の場所は機能しているのですか

という質問ですね。つまり、ないです。去年の全米アジア研究会に行っただけですね。私が行ったのは日本からのかなり有名な先生を集めて明治維新についてのですね。それを聞いたかったです。だけどそこには、女性が入ってなかった。入ってなかったので委員会が二人の女性を強制的につけたんですね。しかしその二人の女性が明治期の専門知識はなかったんですね。戦後の文学とか別の専門、全然明治維新に関係ない二人の女性をつけたんですね。その女性の発言が明治維新のテーマに何も関係ないことをすごく大きい声で話しているんです。その内容が性的差別、女性に対する差別は許さないというようなもの。そういうようなものは学問的なレベルがすごく落ちて、もう何も期待できないと思っただけですね。だけど学会のものばかりでなくて、つい最近は大学という制度が死んだということを発言しています。なぜかというところ、大学が技術的な学校と違っているのは大学は理性をつかって真理を追求するはずの制度です。だけど大学の中で教授の人たちは学生も含めて真理という言葉を使わない。信じなくなっているんです。大学は技術的な専門学校に落ちたので大学は理性をもつてものを対話する場ではなくなっているんです。学会ばかりでなく、大学もダメになっていると思います。

モーガン・ドーク先生のおっしゃる通りです。私がウイスコン

シン大学に入る前に私の意見が大学のほとんどの人と大分異なっていることが分かった上で大学院に入ったわけですけども、出来れば異なった意見を持つていて人と対話がしたいというのが目的でした。最終的に私の言っていることに納得してくれるかどうかは別にして、ただただ議論がしたいという意識で入りました。結局私が肅正されてブラックリストに入れられてレイシストとかファシストとかあらゆるレッテルを貼られて、いま麗澤大学に来て幸せな人間になりました。

西岡・大変刺激的な意見を聞かせて頂いて感謝します。二つのことを言いたいんですけど、まず一つはドーク先生は、日本の方がまだましであるというお話をされたんですが、一方で週一回集まるという伝統を持っているアブラハムの信仰がある所はアメリカの中でも分断化あるいは道徳の退廃のような度合いが低いと。日本にはアブラハムの信仰がないにもかかわらずそういうことが起きているというお話をされて大変刺激的だったんですが、私は日本の中で1%にも満たないクリスチャンなので議論がひっくり返ってしまう部分もあると思うのですが、アブラハムの信仰かそうでないかという部分をそれほど強調するという事に若干の違和感があって、先崎先生の言うように超越的な人格神というのは日本にはありませんが、少なくとも祈るという事、つまり自分を超えた存在があるから祈るのであって祈

りというものは日本文化の中に、そして伝統の中にずっとあると思うんです。そして皇室は正に中心で祈る存在として権力とは離れて敬意の源泉は祈るといふ事にあるということ。人間というのは小さなものでそんな大したものではないと、だからこそ誰かに頭を下げると、人以上のものがこの世にあるという意識を持つてるか持つてないかという所は一週間に一回集まるかどうかじゃなくて、集まる人たちはそういう意識を持つていているという点で、日本は一週間に一回は集まりませんがお正月には神社に行きますし、生まれたらまず神社に子どもを連れていきますし、七五三があるし、そして亡くなったら今度はお寺に行くわけですが、絶対的なもの超越的なものがあると、そしてそれが祖先と歴史に意識があつて自分がここにいるのは祖先がいたからだ。日本人はご先祖様といいますが、それがずっとあると。そしてその向こうに神話の世界があつて神とご先祖があまり離れていないという世界観がある。どこの文化でもやはり祈るといふのは人間の特徴で人類の特徴で自分を超えたものがあるという風に思うと、その時に祈るといふ事があるんだと思うんですけれども、それをあまりにも人間が傲慢になつて人間が世界の主人になるといわれるマルクス主義、唯物論みたいになつた後それもなくなつて完全に相対主義になつた今、自分より上の者の存在に頭をさげるといふ事がなくなつて、自分が分断の大きな原因だとすると日本社会には祈るといふ事

は残っているということが大切なことではないかと。日本は無神論だと言われますがそんなことはなくて、日本の文化はある意味祈る文化なのではないかという風にコメントさせていただきました。

もう一つ今のアメリカの学会の話などとの関係の話ですが、ある意味で先ほど先崎先生がおっしゃった時間というものとの関係もあると思うんですね。私は一九九二年に慰安婦の強制連行はないっていう論文を月刊文藝春秋に書いたんですね。ない可能性が高いだろうという事ですが、その時の文藝春秋の編集長が、西岡先生と私が日本社会の中で人非人になつてもいいからこれをやるべきだと言つて、俺は人非人なのかと思つてこれしょうがない、いろんな経緯があつて本当はやりたくなかつたんですが。いろんな経緯があつて、正に学会でページされるとかそういうことは分かつたうえで、やつたんですが、二二年経つたら私が二二年前に問題にした論点について朝日新聞が訂正を出したんです。私から言わせるとそれでも不十分だと思つて批判はしているんですが、まさかこういふことが起きるとは実は思わなかつた。つまりそれは時間をかけて議論をしていく中で通じる部分はあると。事実じゃないことは事実じゃないつてことが実証をして論理で話をしていくと。もちろんだからといって朝日新聞に爆弾を仕掛けるといふようなネットの言いぶりとかそういうのは私は賛成できないのですが、議論をしてい

くと時間が経つとある方向に取れんするという事がありうるんじゃないかと。それを信じないと学問とか言論とかやっていけないんじゃないかと。それを信じながら最終的に自分を超えたものがあつて、時間をかけて自分が死んだあともかもしれないけども通じることがあると信じていることが、道徳がある、善悪があるという立場なんじゃないかと。そういう点でアメリカの学会がダメだと言い切らないで、努力し続けるしかないのではないかとという風に思いました。

モーガン・非常に美しい言葉「祈り」がでしたが、それと関連する先が見えない、未来が見えない、どうなるか全くわからないという中で生きているという現実、それと祈り、また話しかつて、対立してるかもしれないが少しずつ時間を重ねて取れんすることが可能という事について質問があるんですが、まず先崎先生からお答えください。

先崎…二つともものすごい面白いお話だと思って、一つ目の祈りの話については実は反論するような感じになると思うんですが、僕が先ほど最初の発表の時に都会においてはという話をしたと思うんですが、僕は都心部については否定的なんですよ。つまり例えば単純な話なんですけど、近代化していくっていうのはどういふことかという、たとえば電氣を使うようになって

たことよって僕たちは日暮れ以降も同じように継続して働けるようになった。画一化していくってことなんです。時間を平板化して画一化していくというのが近代化の最大の特徴。そういう意味で言うと例えば都心部において仏壇が家からなくなっていくとか、あるいは今の画一化で何を言いたいかっていうと都市部から行事が消えていくんです。自分がサラリーマンでいかに効率的に働くかかっていったらわざわざ墓参りしているのが面倒くさくなってくるんですね。田舎に帰るのが面倒くさい。このように効率化を重んじて画一化を重んじていく社会になつていくと我々が文化として作ってきたリズムですね。この時期にはだいたいこれをやってこういふことをしてついでに九〇歳ぐらいの親戚のおばあちゃんに聞くと忙しいっていうんですよ。何が忙しいのかっていうと、墓参りのための赤飯を作るのが忙しいとかとにかくそういう極めて細かいことで忙しいんですよ。その草取りやらなきやいけないとか。それが明日にでもどうしてもやらなきゃいけない大事な行事として彼らの中にインプットされているんですね。僕からしたら草むしりなんて正直どうでもいいような気がするし、それより締め切りの原稿を書く方が大事だと勝手に勘違いしているんですよ。それよって失われているものって大きくて。僕は東日本大震災のときに福島県の大学にいました、しかも浜通りという日本で一番というか世界で一番なんです。福島原発が一番近い

大学に所属していて被災してるんですよ。その時の感覚で言うと、あの時初めて日本に祈りを回復する可能性があった気がするんです。あれだけおびただしい人が近くで死ぬと、二万人近い人が亡くなるわけですね。二万人で知り合いが二〇人いたら何万人の人が関わるのかって。あの時日本人はなかなか謙虚だったような気がするんですね。週刊誌にも書いてありましたが火葬する時間がないから土葬して埋めていく人たちに対して皆首を垂れていましたよ。あの時に死者っていうのが身近になった瞬間だったんですけども、それをそそくさと忘れて生きてるのが我々なんで、そういう意味で先生の話はすごく大事だし、すごく示唆的である。もう一つ、二点目の話が、二二年間かけて真理が獲得されたって話ですよ。これはとっても日本において大事な気がしていて、どういふことかということによって理性を信じているってことですよ。真実を探求するということ強く信じている。これがなくなつた瞬間に日本人はニヒリズムに陥るとどうなるかって言うと所詮人間なんて暴力的だ、所詮人間なんてこんな存在であるという動物と同じようなもんだと、女性がいるのを見るといかがわしいことをするのが所詮男であると、そういうことがまかり通る社会になっていくんですよ。それで僕が不愉快だったのは去年、保守派とされているある論客がおおよそそういうことを言って、LGBTについて言った人に対して反論をしてある雑誌が休刊に追い込まれたん

だけど、そのある論客が言ってることは自称保守主義者らしいんだけどおおよそ僕には保守主義者には見えなかったね。だって、所詮人間なんてこんなものであるというんだから。保守主義者ってのはそういう風に言う人に対して、いや、だけど人間にはなにがしかの道徳があるとか、やはり人間には理性的なところがあつて真理を探究したくなるんだとかそういうことを言うのが保守的な人がやるべきことであつて、そのところが先生はやり続けられて二二年目の証明をなさつたわけだから、やっぱりアカデミーとか学問って最後の牙城なはずなんで、そこに感動したという感じですよ。

山岡…先生方のある種の現状認識というものが、アメリカに比べれば日本の方がましだという前提であつたのかなと思うんですよ。それは確かにそうなのかもしれないですよ。例えば八〇年代や九〇年代初頭と比べた時に、格差という観点でも人々に与えたネガティブなインパクトというのはものすごく大きいものがあると私は感じるわけです。例えば電車のつり広告で、五〇万の仕事、三〇万の仕事云々で炎上するとかですね、それは全体的に貧しくなつてしまつたデフレの効果かなど。八〇年代や九〇年代初頭だったら問題にならなかつたんじゃないかという気もするわけですね。その格差の問題というのは対アメリカというより日本のスケールの中で深刻化していると思う

んですが、ただその中で日本特有の問題というのがあって、例えば八〇五〇というような問題。引き籠るんだだけでも高齢の親に依存していてそして非業の死を遂げる、あるいは孤独死する。つまり先ほど大野先生のお話の中でポラライゼーションとかの両極化のお話が出てきましたけれども、日本が直面している問題というのはもちろんそれもありますけれども、個別のエイリアネーション、個別化、リストレンジメントということがですね、より深刻であるという見方もできるんじゃないかという風に思うわけなんです。そういう観点からした場合にアメリカとの比較においてベターかどうかということと、日本独特の問題というのは何なのかということですね。各先生方にコメント頂けたらなと思います。

**大野**…今の八〇五〇の問題の背景にあるのは、家族の問題は家族で解決してくださいという、これはよく言うならば、家族が道徳の中心ですよという家族観の延長線上にあるわけですが、結局それはある意味で言うと、うちの家族はうちでしっかり見ると。よその家族はその家族の責任だから私たちは知りませんよという風な現実になってしまってる問題なんだと思います。そこにおいては社会における支援というものの意味はあると思うんです。現実には社会において問題があるときは私たちはどういう手の差し伸べ方ができるんだという、現実の問題から議論す

るってそういうことだと思っんですね。そういう点でいうと、家族のことは家族が第一っていうのは一歩間違えたらうちの家族のことはしつかりやるからほかの家族のことは知りませんよというふうになってしまおうという。そういう意味では社会的連帯っていう意味が出てくるかなという風に思います。

**先崎**…うまく答えられない気がするので未来志向で一つだけ言いますが、八〇五〇問題と聞いて思い出したのは、一〇年前私はフランスに一年ほど留学していたんですが、その年が猛暑だったんですよ。そしたらパリを中心にしておそらく二万人ぐらいの人が孤独死してるんです。これはなぜかというと、家族が高層階に住んでいるアパートマンに行かなかったから水とかが不足して死んだっていう事があって、そのぐらいフランス社会においても個別化、孤立化みたいなのがすごいんですよ。日本で二万人死んだら大事件になるじゃないですか。そういう意味で言うと日本国内だけじゃなくてつながりがあるのかなという感じがして。それで未来志向といたしたのは、今日の話で出てきたのは日本に恐らく今後移民問題も含めて初めて宗教における分断とか、社会における今まで日本はなんとなく日本人でやってきたのがあからさまに分断される。警察官だってほとんど宗教の事知らない連中がなっていくんですがそこでおそらくイスラム教徒とヒンズー教徒がいきなり喧嘩したりということが

日本国内で本気で起こるわけですね。そういった問題に、今のフランスの話じゃないですけど先進国でほかの国がなっている日本は恐らくある意味で一番遅れた先進国で、アメリカとかの方がよっぽどそういう問題があらさまに出ていているんですね。カトリックの保守の話をしましたけど、すぐに思い浮かぶのはほかの国から来た宗教は一体アメリカではどううごめいているんだろうか。そういうことを早めに研究して日本も対処していかないと、何かの制度を新しく入れるときはその対処法みたいなものを海外に早急に学ぶ必要があるというのが未来志向での私の答えです。

ドーク・私の結論とするところは大野先生のおっしゃったとおりだと思えます。ただ私はもう一つ挑発的な結論を出したいと思えます。先ほど西岡先生がうまくおっしゃったと思うんですが、日本人は祈りますね。毎日祈ります。「いただきます」というのが一つの祈り。でもこの祈りは習慣的な祈りに限らず、日本人が社会的な行動をすることが、アメリカ人と比べるとそれ自体が祈りのような行動だと思えますね。思いやりとか。人のことを良く見ると。さっきおっしゃったような pragmatism。だけどこれが私の挑発的な発言です。英語で言うんですけど、「The problem of pragmatism doesn't work」「実用的な問題が実用的でない」。だけどそう考えると日本が実用

主義に結論を依頼できるかどうかはまた別の問題だと思えます。実用主義というよりやはり祈りを求めれば、今までは祈りの文化が日本を支えてきたのだから、その祈りの文化を忘れずに、祈って祈って家族から社会までを保守できると思います。アメリカからの真剣な願いなので、がんばってください。